第一章　考古学より見た先史・歴史時代

第一節　先土器時代

1　人類のはじめ

地球上で最古の人類は、アフリカ大陸で発見された「アウストラロピテクス・アフリカヌス」とされている。彼らは猿人と呼ばれ、直立して歩行し、原始的な道具を使用することができた。彼らが生きた年代はおよそ二百万年前にさかのぼるとされている。

直立歩行は、自由になった両手により道具の発達を促した。さらに直立することによって脳容積が多くなり、猿人として人類への第一歩を踏み出すことができたという。

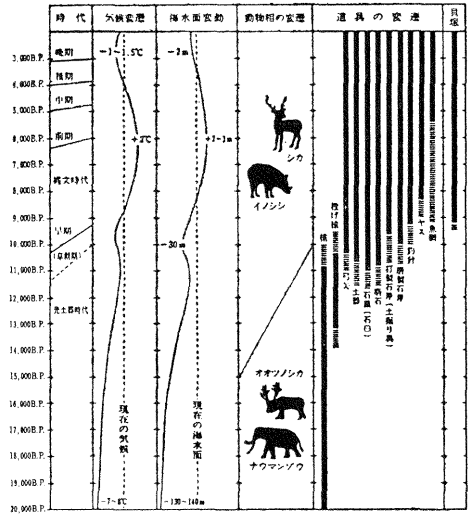
猿人より新しい人類として、中国の北京原人（シナントロプス・ペキネンシス）、インドネシアのジャワ原人（ピテカントロプス・エレクトス）などが発見されている。彼らは直立原人（ホモ・エレクトス）と呼ばれ、その年代は約四十万年前から七十万年前とされている。なお、北京原人は火の使用を行った最古の原人として知られている。

つぎに人類の歴史は、ネアンデルタール人に代表される旧人から現世人の直接の祖先とされる新人へと進化の道筋をたどる。

人類の営みが展開したこの二百万年間の地球は、氷河時代とも呼ばれ、気候が極度に寒く大陸が広範囲に氷に覆われた時期（氷期）と、気候が温暖で氷が後退した時期（間氷期）とが四回ほど繰り返されたという。

この氷河が発達した時期は海水が減り、地球上の海水面は低下する。最も低い海水面は、現在よりも約百五十㍍下であったとされている。この状態を日本列島においてみると、南では九州と朝鮮半島、北では北海道とサハリン、カムチャツカ半島、シベリアが結ばれ、日本海は湖になる。

最後の陸橋ができたのは約二・五万年前から一・七万年前（マキシム・ウルム亜氷期）とされ、マンモス、ナウマン象、オオツノジカなどが日本列島に渡ってきた。また、これらの獲物を追って人間も渡ってきた。



最終氷期末以降の自然環境・動物相と道具の変遷（『縄文人は生きている』1985）

マンモスは北海道で発見されているが、ナウマン象については各地で化石が発見されている。山梨でも山梨市江曽原の兄川や、甲府市塩部の相川河床からナウマン象の臼歯などが発見されている。

日本列島の化石人骨としては、兵庫県の明石原人、栃木県の葛生人、愛知県の牛川人、静岡県の三ヶ日人、同県の浜北人などが発見されている。なお明石原人については、近年原人までにはいかないという説もある。いずれにしても、これらの人類が陸橋を渡って日本にやって来たことは間違いのないところであろう。

2　先土器時代

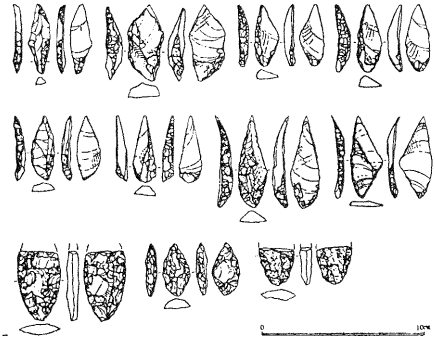
日本列島に人類の営みが確認できるのは、二百万年という長い人類の歴史のうち、わずかに数万年前からである。考古学的には今日、旧石器時代とか先土器時代という呼び方をしているこの時代の遺跡が注目されるようになったのは、昭和二十四年（一九四九）に実施された群馬県岩宿遺跡の発掘調査によってである。

赤土（ローム層）の中から石器が掘り出されたことによって、縄文時代以前の文化が日本にも存在したことが確認された。ローム層の形成は地質年代からは洪積世であり、一万年以前に堆積しているのである。

山梨においても富士山や御嶽山などの火山活動によって堆積したローム層中より石器が出土しており、現在までに約二十ヵ所の遺跡が知られている。その多くがおよそ一・五万年前である。

山梨の先土器時代の遺跡としては、富沢町天神堂遺跡がよく知られている。黒曜石やホルンフェルスを材料にナイフ形石器や、槍先形尖頭器のほか、彫刻刀のような彫器や、皮などに穴をあけるための石錐など石器が多数出土している。また、調理施設とされるこぶし大の石を集めた礫群も十ヵ所ほど発見されている。

一宮町の釈迦堂遺跡群からもナイフ形石器などをはじめ、各種の石器が出土しており、さらに高根町の丘の公園からも出土している。遺跡の分布は、県下全域にみられることから今後、調査の進展によって遺跡数が増えるとともに、先土器時代の様相もより具体的になることが期待される。なお石器の材料の大部分を占める黒曜石は県内からは産出せず、長野県の和田峠付近のものであり、およそ一・五万年前において、物資の交流が広範囲に行われたことをうかがうことができる。



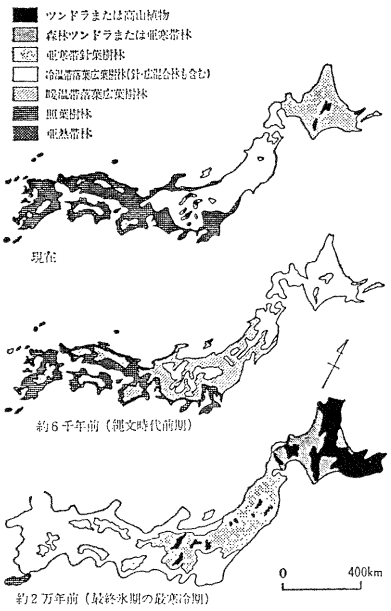
先土器時代の石器（釈迦堂遺跡群）
上２段　ナイフ形石器
下１段　槍先形尖頭器

本村においては現在のところ先土器時代の遺跡が確認されていない。この時代が狩猟・採集の段階であり、自然環境に左右されるきわめて不安定な生活であったと考えられることから、食糧を求めて絶えず移動が行われたことであろう。水と食糧が得やすく、日当たりがよく水はけのよい土地を選んで生活を営んだことが知られるので、本村にもかつてこのような好条件の土地が推定できることから、いずれ先土器時代の遺跡が発見されることも期待されよう。

第二節　縄文時代

1　概　観

今から約一・二万年前から約二千三百年前までを考古学では縄文時代と呼んでいる。先土器時代に引き続いて狩猟・採集段階にあったが、土器の製作開始をもって縄文時代の始まりとする。



日本列島の植生の変遷
（『縄文人は生きている』1985）

気候の温暖化にともない、日本列島の亜寒帯針葉樹林は減少し、次第に落葉広葉樹林が拡大する時期となる。このような自然環境の変化によって、前代に重要な食糧となった大型哺乳類の減少や絶滅を招くことになる。こうした変化に伴い新たな生活環境に適応した生活技術の発展をみることになる。

落葉広葉樹林が広がったことによって、食糧とし

て重要性を増したのは、クルミやドングリをはじめとする木の実などの植物性食糧であった。これらの植物の多くは生食よりも、あく抜きや製粉といった加工に加えて加熱を必要とするものである。このような食生活の要請から土器が製作されたと考えられている。

縄文土器は、およそ一万年という期間を通して製作され、使用されたものである。縄文という呼称は、日本考古学の出発点ともなった大森貝塚の発掘調査の成果に由来している。すなわち出土した土器に縄目の文様が施されていたことによる。現在、縄文の有無にかかわらず、この時代の土器の総称として縄文土器という名称が用いられている。

煮沸を目的とした土器の出現は、可食植物の範囲を広げると同時に、獣肉・魚介類の腐敗防止ともなり、さらに食糧の保存・貯蔵を可能にした。これによって縄文人の食生活は大いに安定することになったのである。

縄文時代は、土器の製作や植物性食糧の増大のほかに、弓矢の使用や海の資源の入手などの特徴がある。

大型の哺乳類が減少し、それにかわってシカ、イノシシ、ウサギなどの中・小動物が繁殖すると、先土器時代に大型獣を追った石槍は、敏しょうな動物の狩猟具としては不向きとなる。これにかわって新たに弓矢が開発され、狩猟具として発達する。

縄　文　土　器
（中道町上野原遺跡・縄文時代中期）

矢じりとして、黒曜石などを加工してつくられた石鏃は、各地の遺跡において発見されており、弓矢による狩猟が普及していたことをうかがうことができる。

海洋資源の入手は、日本列島における一千ヵ所以上の貝塚の存在から知ることができる。貝塚に堆積した

魚介類の遺体は、きわめて豊富なものであり、縄文時代における活発な漁撈活動を示している。

山梨のような内陸部にあっては、湖沼・河川などにおける淡水の魚介類の捕獲が考えられるが、臨海地域とは異なり貝塚を形成するほどの主要な生産活動であったとはいえない。

以上のように狩猟・採集および漁撈を通して食糧獲得をはかった縄文人は、生産性を高めるために各種の道具を生みだしていった。彼らは一万年という長い期間において、しだいに定住性の高い生活を営んでいき、集落の発達をみたのである。

縄文時代の集落は多くの場合、食糧獲得の条件のよい場所を主体として、台地や丘陵や河岸段丘上に営まれている。集落は小規模であり、数軒から十数軒ほどで構成されているのが一般的である。

住居は竪穴住居と呼んでいるが、地面を数十センチ程度掘りくぼめて床をつくり、中央に炉を設け、床に掘立柱を据えて屋根をかけた構造である。

竪穴住居址（上野原遺跡・縄文時代中期）

縄文時代の概要にふれてきたが、この時代は世界史的な時代区分によれば、新石器時代に対比される。しかし磨製石器と土器の製作、および農耕・牧畜による生産という諸要素が新石器時代の指標とするならば、縄文時代については農耕・牧畜の存在はいまだに証明されていない。初期的な農耕牧畜の段階としての半栽培、半飼育が存在したという考え方もあるが、なお不十分であるとされている。

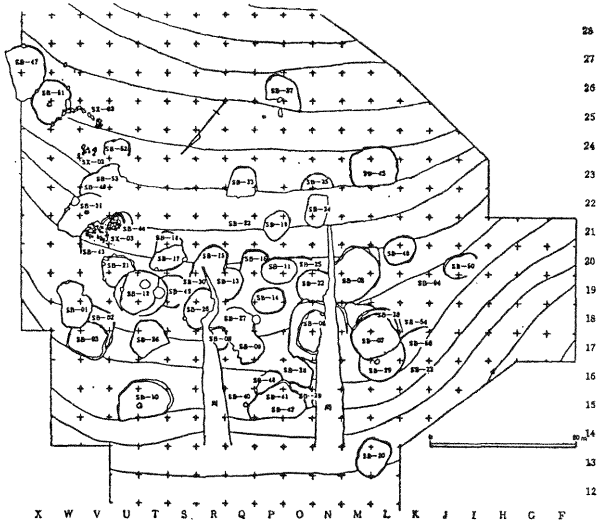
縄文時代は、新石器時代の範ちゅうに入るものの、海峡によって大陸から分断された日本列島に独自の文化を育てた時代と位置づけられよう。先にふれたように一万年にもわたる縄文時代は狩猟・採集・漁撈という食糧採集の段階にあって、ゆるやかな社会の発展をみたが、自力による農耕社会への転換を行うことができなかったのである。

2　山梨の縄文社会

山梨県下における縄文時代の遺跡は、その分布調査によって甲府盆地の低地の一部を除いてすべての地域に存在することが明らかとなっている。遺跡数としては千六百ヵ所を数えており、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六期に区分される縄文時代の中でも中期（約四千五百年前）に相当する遺跡が多い傾向が指摘できる。

縄文時代中期は、中部山岳地帯の山梨が最も充実した段階にあったことが考えられる。この時期の代表的な遺跡として一宮・勝沼両町にまたがる釈迦堂遺跡群が知られるが、その発掘成果から中期社会の様相の一端を考えてみたい。

釈迦堂遺跡群は、御坂山系の山裾に発達した京戸川扇状地の扇央部に形成された遺跡群である。標高四百五十㍍付近で四つの遺跡から成り立っている。その一つ、塚越北A地区では、中期中葉の典型的な集落跡が確認されている。八軒の住居址が径

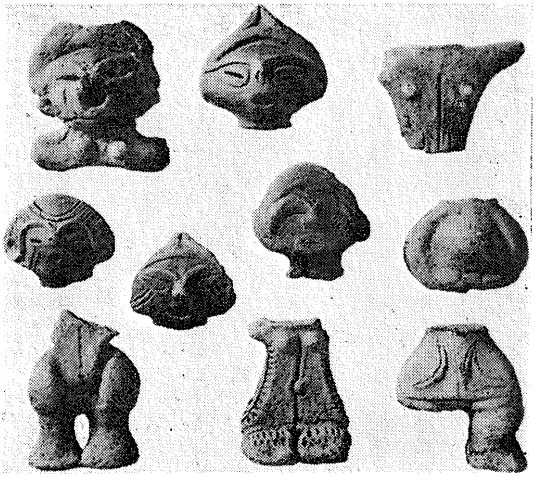


釈迦堂遺跡群（塚越北A地区）住居址

四十㍍ほどの環状をなし、その内側に五十五基をこえる土坑が存在していた。

縄文時代の集落は、初めは二〜三軒程度で構成されたきわめて小規模なものであったが、前期後半ころから環状や馬蹄形を呈する集落が見られるようになり、やがて中期には一般的な集落形態として発展する。塚越北A地区では早期・前期・中期と集落跡の複合状態をとらえることができたが、いずれも各時期の集落構造の典型例といえるものであった。

中期の集落を構成する住居は、平面形が約五〜六㍍の円形であり、中央付近に石囲い炉を設けている。一軒の家族構成を五〜六人と考えた場合、八軒の住居で四十〜五十人ほどの集落構成員となる。



土偶（釈迦堂遺跡群）

環状集落の内側に設けられた土坑群の多くが墓と考えられるものであり、直径一・二㍍〜〇・五㍍ほどの穴である。そのうちの半数からは完形に近い土器が埋設された状態で出土している。これらの土坑の存在は、縄文人の精神生活を知る上で興味深いものである。

また、釈迦堂遺跡群で特徴的なものとして、千点をこえる土偶の出土がある。女性をかたどった土製人形は、ほとんどが破損した状態で出土していることから、病気の治癒や自然の恵みを願って製作され、用いられたものとされている。さらに、土鈴や土笛をはじめミニチュア土器の存在は、彼らの精神生活の多様な一面をうかがわせるものであ

る。

生活用具としては、打製石斧や磨石・石皿などの石器が出土している。打製石斧は球根類や根茎類の採集用具であり、磨石や石皿は製粉具である。落葉広葉樹林に覆われた釈迦堂遺跡群一帯はドングリ、クリ、クルミなどの堅果類をはじめとする豊富な植物性食糧が採集できた環境にあったことが考えられるのである。

前期の石器には、石鏃や石匙などの狩猟や動物の解体、調理に使用したものが多いことから、生産活動に占める狩猟の割り合いが高かったことを示すものであるという指摘がある。さらに、中期には石鏃が減少し磨石、石皿、打製石斧が急激に増えていることは、植物性食糧への依存度が増大したことを示しているともいわれている。釈迦堂遺跡群の中期の集落においてもこのような傾向を認めることができる。

釈迦堂遺跡群に代表されるように、山梨の縄文時代中期は、豊かな植物性食糧を背景に大規模集落が発達したが、主に八ヶ岳や茅ケ岳の山麓地域、曽根丘陵から塩山、牧丘にかけての一帯、さらに桂川とその支流域に濃密な分布がみられる。

本村は、富士北西麓に位置し、動植物食糧の獲得も行いやすい環境にあったことが考えられるのであるが、現状では遺跡の数が少ない。このことは、溶岩や樹林に阻まれて発見が困難となっているためといえよう。

3　本村の遺跡

本村における縄文時代の遺跡は、山本寿々雄氏が昭和三十年（一九五五）に『甲斐石器時代遺物発見地名表』で、大田和遺跡と水上遺跡を紹介している。さらに昭和四十七年（一九七二）の『山梨県埋蔵文化財分布調査』において、調査員の清水澄氏によって両遺跡の追認が行われている。

大田和遺跡は、大田和字上川原に所在し、北に足和田山が東西に横たわり、その山裾の上水道水源地近くに位置す

る。縄文時代の早期・前期の遺跡とされている。

水上遺跡は、鳴沢村字水上に所在し、足和田山の山裾に位置し、近くには湧泉がある。前期・中期の遺跡とされている。

今回の村内の分布調査（昭和六十一年・一九八六）によって、新たに二遺跡を確認することができた。鳴沢村字地蔵前においてかつて黒曜石の石鏃が採集されている。採集者によれば地表下約二㍍で発見したという。石鏃はおよそ中期と考えておきたい。このほかに、小暮遺跡で縄文土器を再利用した土製円盤が発見されている。

本村の遺跡は、大田和、水上、地蔵前、小暮遺跡の四ヵ所ときわめて少ないが、先にもふれたように、溶岩流などの下部には遺跡の存在が十分に考えられるのである。現在までの考古資料では、本村における縄文時代の様相を具体的に展開することは難しいといわざるを得ない。しかしながら、四遺跡を通して本村にも縄文時代の早期・前期・中期にかけての人びとの生活の痕跡は確かめられるのである。

今後、さらに資料の増加をまって本村の原始社会の様相を復元したいと思う次第である。

（田代　孝）

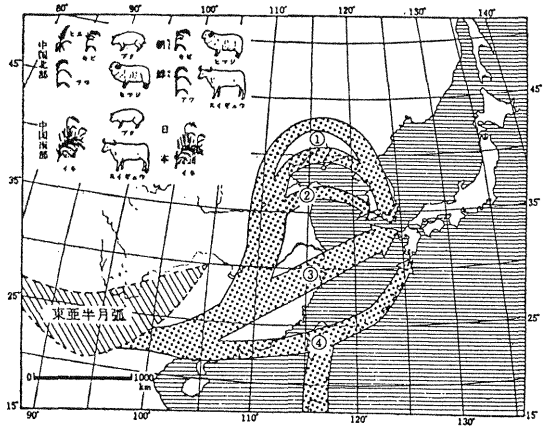
第三節　弥生時代

1　稲作農耕のはじまり

現在私たちが主食としている食べ物〝コメ〟は今から二千三百～二千四百年前に日本に上陸し、以来我が国の農作物としてなくてはならないものとなっている。稲作伝来以前の人々が獣を狩り、魚を取り、木の実や根茎類を採るという、言ってみれば自然の幸を採集・利用する食糧獲得経済に根ざしていたのに対し、弥生時代は食糧を生産・管理

する経済へと進展した時代として特徴づけることができる。

稲作は元来東南アジアから中国南部の地域に起源を持つ農耕技術である。この技術が日本へ伝播した経路は、長江下流域から東進して南朝鮮および日本の北九州地方に至るルートと、長江下流域から海岸沿いに江蘇省あるいは山東半島付近に北上し朝鮮半島の西海岸、南朝鮮を経て北九州へ至る二つのルートが有力視されている（左上図②と③）。稲作技術はこれらの経路上に広がる様々な知識や技術といった多くの情報を取り込みながら日本にもたらされ、日本の伝統的な文化（縄文文化）と融合して弥生文化という農耕文化を誕生させたのである。



イネの道

（安田喜憲『環境考古学事始』1980）

稲作とともに大陸から伝わったものには金属器およびその製造技術、養蚕と絹、紡織、ガラスなどがあるが、特に金属器の使用は日本列島に住みついてきた人々にとって数十万年続いてきた石器時代からの脱皮を意味し、それ以後の農業生産を高める上でも欠かせない存在となった。弥生時代の金属器は鉄と青銅を素材としているが、鉄器は熊本県斎藤山遺跡で弥生時代前期の土器に伴って発見された小型の鉄斧がもっとも古く、当初から実用品として搬入されたことが知られる。これに対し青銅器は、鉄器より百年ほど遅れて北九州地方の墓の副葬品として登場する。当初から宝器としての性格を色濃く持っていた青銅器は、銅鐸や銅剣、銅矛、銅戈などの農耕祭祀に欠くことのできない祭器として発達をとげていくのである。

日本においてこれらの大陸からの新しい文化をいち早く受け入れ、弥生文化へと踏み出したのは、北九州地方の人々であったと考えられている。このことは近年発見された福岡県板付遺跡や佐賀県菜畑遺跡で発見された日本最古の水田跡によっても実証することができる。ひとたび北九州地方に根をおろした稲作は、急速に西日本を経て伊勢湾と若狭湾を結ぶ列島のほぼ中央部まで波及するいっぽう、日本海側の海流にのって一挙に東北地方にも広がりをもつことが明らかにされて来ている。そして中期後半までには北海道と沖縄列島を除くほぼ日本全域に伝播していったのである。

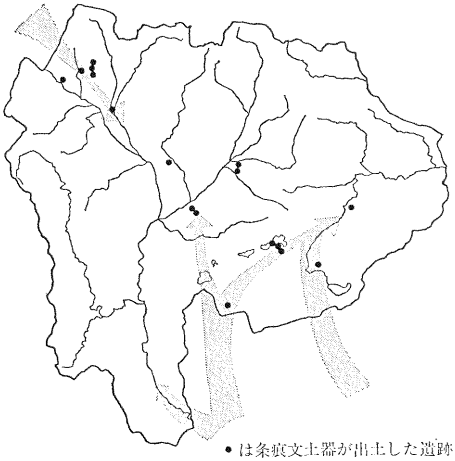
波及当初は未熟な農耕技術もその広がりとともに次第に発達し、人々は耕作可能な広い沖積地へと居住範囲を広げていった。一方、村々の中でも水田の開発や経営に優れた者は次第に社会的な地位を高め、縄文時代には見られなかった身分的な格差や貧富の差が目立ちはじめるようになる。この間の社会的変化については本県の中でも断片的にとらえることができるので、県内の遺跡を例にとって具体的に記述してみたい。

弥生時代に使用された土器は弥生土器と呼ばれる。弥生土器は縄文土器からの技術的伝統を受け継いだ素焼きの土器で、その製法は縄文土器と変わるところがない。しかし、それらを構成する器種構成、つまり生活の中で使用される器の形は縄文時代と弥生時代では大きく異なっている。縄文土器は深鉢や浅鉢などの鉢形土器を主体としているが、弥生土器は壺、甕、高坏、鉢など用途によって器の使い分けがはっきりと行われ、器形による機能分化が一層明確化される。日常什器である土器の変遷から考古学の分野では弥生時代を前期・中期・後期の三時期に区分している。

弥生時代はわずか六百～七百年という短期間であるが、稲作を主体とした農耕社会への転換、階級社会の成立、金属器の導入などを軸とした一大変革期として日本歴史の重要な位置を占めている。

2　山梨の弥生文化

山梨県を含む中部山岳地方に弥生文化が伝えられたのは、前期末～中期初頭と考えられる。これらの地域では初期弥生土器として西日本に広く分布していた遠賀川式土器とは対照的に、器面全体を貝殻や櫛状工具による条痕文でおおう土器群が主体をしめる。東海地方西部で発達をしたこれらの土器は水神平系条痕文土器と呼ばれ、東日本の弥生文化の伝播の指標となる土器群である。県内においても三十ヵ所ほどの遺跡でこの土器が発見されているが、その分布は八ヶ岳南麓地域、甲府盆地周辺、富士五湖から桂川上流域などに集中する。このことから山梨県への弥生文化の流入は、東海地方西部から天龍川を北上し諏訪湖を経て八ヶ岳山麓に至る経路と、東海道東部から富士山麓を通り郡内地方および甲府盆地へ至る経路の二つの道をたどったことが推定される。この甲斐の地に波及した弥生文化は中期を通じて普及、定着し、後期には甲府盆地の沖積地や谷水田をひかえた丘陵上にも集落が営まれるようになった。その集落の様子を概観する前に各時期の遺跡の広がりをみてみよう。



山梨への弥生文化波及

本県の初期弥生土器は先述したとおり八ヶ岳南麓、甲府盆地、富士五湖から桂川上流の郡内地方など峡南地方と県北東地域を除く県内のほぼ全域に分布している。郡内地方に限ってみると上九一色村の南二条遺跡や河口湖町鵜の島遺跡、都留市生出山山頂遺跡などの遺跡が存在する。続く中期後半の遺跡の発見例は現在のところ非

常に少ないが、都留市牛石遺跡で住居跡が三軒発見されている。後期には盆地内の微高地や周辺の丘陵上に大規模な集落が営まれていたことがこれまでの発掘調査で明らかにされている。

ところで、初期弥生の段階では水神平系条痕文土器と言う同一の土器文化が県内をおおっていたのに対し、中期後半になると甲府盆地と郡内地方の土器に地域的な差が生じはじめ、この差は後期に至って一層顕著なものとなる。両地域の土器様相の差は、たがいに隣接する地域の影響に起因するもので、郡内地方および甲府盆地南部においては駿河、遠江などの太平洋沿岸地域からの土器文化、国中地方北部においては信濃方面からの櫛描文土器文化の影響を強く認めることができる。

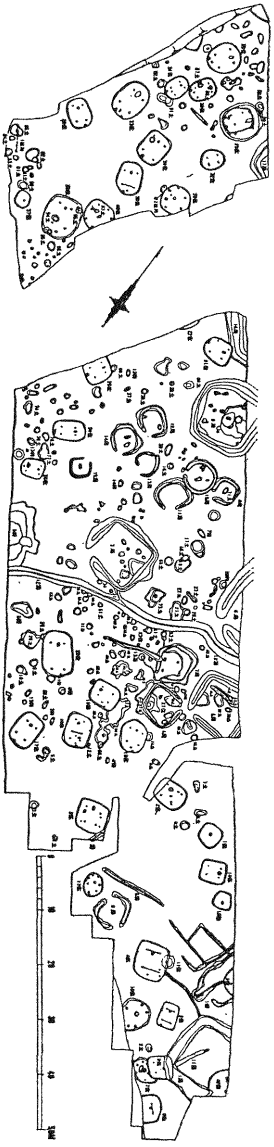
時期	長野	国中	郡内
前期	荒神沢 林里	金生17住 柳坪A16住	鵜の島 宮原
中期	庄の畑 阿島 栗林 百瀬	米倉山 ★ 幸町	生出山山頂 牛石 富町
後期	吉田 箱清水	金の尾 ★	★ 住吉 六科丘 ★

▒は櫛描文系土器群

山梨の弥生土器の編年

本村を含む富士山麓地域でこの時代の集落遺跡の調査例は存在しないため甲府盆地の遺跡によって当時の農村の姿を紹介してみよう。

甲府盆地を流れる貢川左岸の自然堤防上に位置する金の尾遺跡は、標高二百八十五㍍の低地性の遺跡である。昭和五十二年（一九七七）に中央自動車道建設に伴って発見された遺跡で、発掘調査の結果、縄文時代と弥生時代の村跡が確認されている。発見された弥生時代の遺構は後期の住居址三十二軒、方形および円形周溝墓十七基、溝状遺構十三本の他に土坑などが存在する。この時代の住居の形態は縄文時代同様に竪穴式住居が一般的であるが、収穫物を貯蔵する



金の尾遺跡全体図
（末木健『金の尾遺跡』1987）

には高床式の建物が使用された。金の尾遺跡の住居址は平面の形が隅丸長方形または小判形を呈し、四本柱を基本としている。住居中央からやや奥まった所に炉を設け、入口には梯子の痕跡が認められている。居住区に隣接して発見された周溝墓と呼ばれる墓はおそらくこの村に住んでいた人たちの共同墓地であったのであろう。このように当時の生活空間は居住地域、墓域に加えて水田や畑と言った生産の場によって構成されたと考えられる。山梨県では生産に直接むすびつく遺跡はこれまで発見されていないが、墓域は金の尾遺跡以外にもいくつかの遺跡で発見されている。

甲府盆地の南縁、曽根丘陵上に位置する上の平遺跡はその中でも最も大規模な墓域で、過去五回にわたる調査で百二十四基の方形周溝墓が確認されている。「方形周溝墓」とは墓の周囲を四角形に溝が巡ることから付けられた墓の名称であるが、溝の内側には低い盛り土がなされ死者を葬ったものと考えられる。上の平遺跡の方形周溝墓は百年余りの短期間に造られたもので、いくつかの村々の連合によって計画的に造営された共同墓地と考えられる。周溝墓の規模に見られる大小の差は古墳が出現する直前の社会的格差を反映するものであり、ここに階級社会の進展を認めることができる。

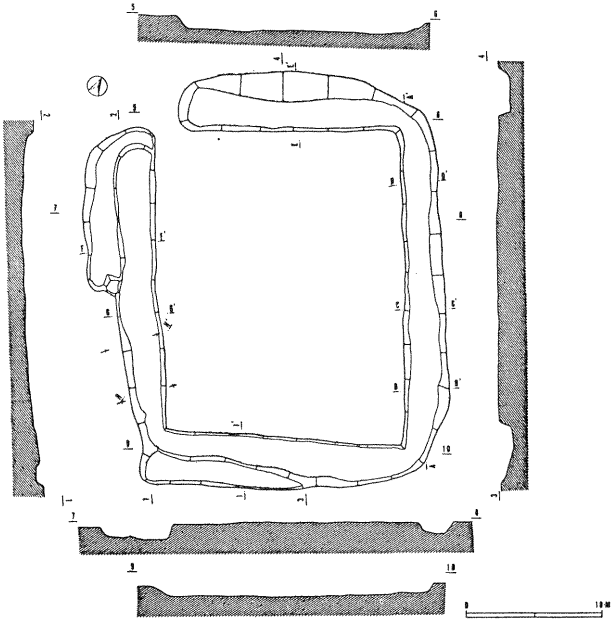
鳴沢村を含む郡内地方においては弥生時代の集落跡の発見例はほとんどないが、本県弥生文化が流入するルート上に位置するため今後も遺物等の発見に留意する必要があろう。

第四節　古墳時代

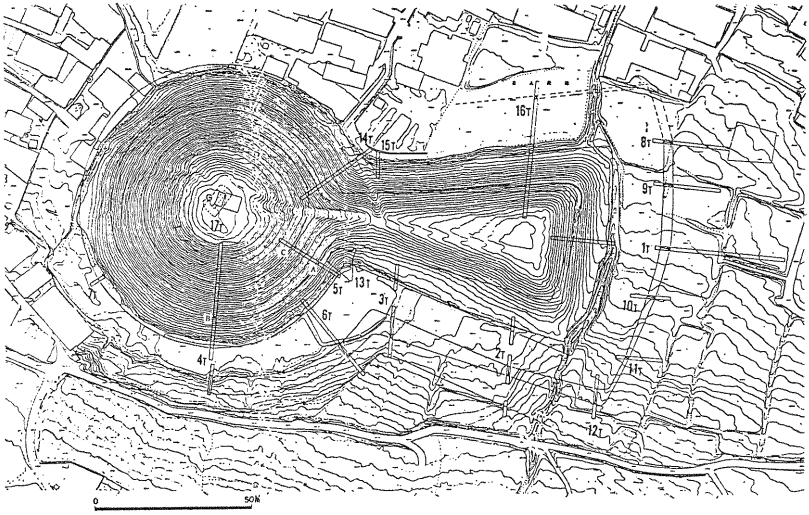
1　墳墓とその時代

三世紀の後半から四世紀初めにかけて近畿地方を中心に前方後円墳と呼ばれる定型化した墳墓が出現する。前方後円墳に代表される古墳は弥生時代に一般的であった共同墓地とは隔絶した場所に築かれた首長墓であり、その規模や内部施設、副葬品などにおいて前時代の墓とはかけはなれた特質を持っていた。古墳とは、当時の支配者層の政治的理念を最も端的かつ視覚的に表すための、いわば権力の象徴として築造された一大モニュメントであったのである。

このような墳墓が登場する背景には弥生時代に萌芽した階級分化が進み支配、被支配の関係が明確化されたこと、さらに分立していた小国家が統合され、特に大和を中心とした強大な政治的連合体が出現したことなどがあげられ



上の平遺跡１号方形周溝墓
（小林広和「山梨県上の平遺跡」1981）



中道町銚子塚古墳

る。各地に登場した地方豪族は、強大な大和勢力に結び付くことによって自らの権力を強め、その象徴である古墳を築いていったのである。古墳と言う墓制形態に最も端的に表される古代国家の幕開けとなるこの時代は「古墳時代」と呼ばれている。前方後円墳の出現に始まる古墳時代は三世紀後半から七世紀後半の約四百年間を指す。

古墳時代は紀元五百年を境として前期と後期に分けられ、古墳そのものにも大きな変化が見られる。前期古墳は強大な権力を背景に持つ首長墓として出現、発達するが、後期になると群集墳と横穴式石室の導入に示されるように前期の段階で支配されていた側の一部の者たちが中・小首長層として台頭し古墳を築くようになる。また、後期には竪穴式石室では見られなかった追葬が一般化し、古墳に対する認識が著しく変化したことが理解される。しかし、古墳の普及と認識の変化は、図らずもこれらの古墳の持つ象徴性を衰化させ、その政治的役割を失わせて行く結果となったのである。

本県に初めて古墳が登場する舞台は、甲府盆地南縁の中道町周辺地域にある。中でも米倉山山腹に位置する小平沢古墳は前

方後方形の墳丘をもち県内最古の古墳と考えられている。古墳の全長は四十五メートルで、内部主体は木棺直葬と推定される。副葬品として勾玉、舶載斜縁一神二獣鏡が出土しており、およそ四世紀中ごろの古墳とされる。続く四世紀後半から五世紀前半には米倉山と谷一つ隔てた東山突端に大丸山古墳や銚子塚古墳が築造され、この地域を拠点に絶大な権力を持った豪族層が出現したことを物語っている。しかし、この地域の繁栄は長くは続かず、五世紀の後半に造られた丸山塚やカンカン塚古墳などのように次第に規模が縮小化していく。

四世紀の古墳が中道周辺に集中していたのに対し、五世紀になると境川村、八代町、三珠町、豊富村、櫛形町など盆地周辺部へと古墳は拡散する。六世紀には盆地全体に広がり、甲府北部や盆地南東部に横穴式石室を持つ姥塚古墳などにも裏付けされるように、盆地内には新たな首長層の台頭が目立ちはじめる。これは、盆地内の開発が進むにつれ耕地面積が増大した結果、中・小首長層がさらに力を持ち強大な勢力を身につけ、地方豪族へと成長していったためであろう。県内の古墳は甲府盆地を中心に発達し、郡内では大月市周辺のごく限られた地域に存在するのみである。

2　古墳時代の生活

古墳は当時の支配者層と言うごく一握りの人たちの墓であったが、このような社会体制を底辺で支える民衆の暮らしはどのようなものであったであろうか。

古墳時代に生産され、使用された日常什器である土器には土師器と須恵器がある。それらの名称は『延喜式』に見られる土師器(ハジノウツワモノ)、陶器(スエノウツワモノ)に由来しているが、考古学の分野では土師器、須恵器と表して古墳時代から奈良・平安時代に使用された土器の総称として取り扱っている。

土師器は、弥生土器の系譜をひく素焼きの土器で、摂氏七百度から八百度の温度で酸化焔焼成されるため器面は赤

褐色を呈する。土器表面に装飾はほとんどなされず、土器の地域色がいっそう薄れる。土師器は形や製作技法の変化から五領式―和泉式―鬼高式―真間式―国分式に細分されている。

須恵器は摂氏千百度以上の高温で還元焔焼成された土器で、青灰色の硬質の焼きものである。須恵器の生産は日本では五世紀前半には開始されていたようであるが、その生産技術はそれ以前の朝鮮半島の陶質土器の技術を継承し、作り出されたものとされる。これらの土器の編年作業が進んだ結果、現在では住居址や古墳の年代をある程度の精度で知ることができるようになった。

古墳時代の家は、縄文時代以来伝統的な竪穴住居が一般的である。住居の平面形はほぼ四角形で、四隅がやや丸みをおびる。住居内の火所は、五世紀後半になると炉からカマドに変化し、家の内部空間を一変させた。

県内の古墳時代の集落は、その初頭のものが境川村京原遺跡、中道町立石遺跡、韮崎市坂井南遺跡、塩山市西田遺跡、御坂町姥塚遺跡などで発見されており、弥生時代後半より更に飛躍的に集落が拡大したことがうかがえる。郡内地方でも上九一色村本栖湖畔や河口湖町河口湖畔でこの時期の土器が採集されており、本村周辺にも集落の存在した可能性が指摘できる。

五世紀後半の集落は、御坂町二の宮遺跡などで発見されているが、県内全体の発見例は非常に少ない。住居から出土する土器には、これまでの土師器に加えて須恵器が登場する。

古墳時代後期になると姥塚・二の宮遺跡で百五十軒にのぼる住居が発見されているように、大規模な集落が営まれる。この背景には鉄器の普及、灌がい技術の向上に支えられた可耕地の拡大が挙げられる。甲府盆地全域に新たな首長層が伸張し、群集墳が形成される基盤が、この時期に形造られたのである。

昭和四十七年（一九七二）に作成された山梨県埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば、本村の前丸尾遺跡より古墳時

代の高坏が出土したことが報告されている。鳴沢村をおおっている青木ヶ原溶岩流は貞観六年（八六四年）の富士山噴火によって流れ出したものとされているが、この溶岩流によって当時の集落やそれ以前の遺跡は地中深く埋もれてしまったものと考えられる。

（中山誠二）

第五節　奈良・平安時代

奈良・平安時代の庶民の生活

律令国家体制が確立し、しだいに浸透していった奈良時代と平安時代における甲斐国の様相は、どのようであったのだろうか。また、富士北麓に位置する本村の状況は、いったいどうであったか。

史料に乏しい現在では、右の問いに積極的に答えることはできないが、今回の村誌編さん事業に伴う村内全域の分布調査によって得られたわずかな考古資料によっても、少なくともこの時代に村内にも人々が住み、集落を形成し、日々の生活を営んでいたことがうかがわれるのである。

ところで、当時の甲斐国の人々の生活の一端を垣間見る著名な史料に、正倉院宝物の白絁金青袋の墨書がある。それには、

甲斐国山梨郡可美里日下部□絁一匹　和銅七年十月

と書き記されており、この記述によって山梨郡可美里、すなわち現在では山梨市にあたる所に住んでいた日下部某が、和銅七年の七一四年に庸あるいは調として白絁を納めていたことが知られる。また、平城京跡出土の木簡の中にも、

（表）　『甲斐国』山梨郡雑役胡桃子一古

（裏）　天平宝字六年十月

と見えるものがあり、天平宝字六年、すなわち七六二年に山梨郡から中央政府に対して胡桃子（くるみ）が送られていることがわかり、甲斐国に住む人々が納税を通して律令支配機構の中にがっちりと組み込まれていった様子が想像できるのである。

これらの限られた歴史史料の中にも、甲斐国の社会状況や生活の一端をうかがうことができるのであるが、一方、近年の考古学調査によって得られた膨大な資料からは、当時の人々の日常生活が生のまま、具体的に描き出されるようになってきたのである。本村でも、遺跡一覧表と分布図に示したように、各地域に遺跡が点在しているため、それぞれ平地を利用しながら集落が形成されていたことは疑う余地がないところである。

さて、それでは本村に集落が形成されはじめたのは一体、いつごろのことになるのだろうか。今回の分布調査の成果からは速断することは控えねばならないが、しかし村内の遺跡一覧表に示されるように、奈良時代には遺跡は見られず、平安時代以降になって初めて集落が出現していった状況がくみとれるのである。すなわち、この資料による限り、平安時代以降に至って人々が本村に住みつき、村を形成しはじめる様子がうかがわれるのである。

このような傾向は、近年では各地域において普遍的な現象としてとらえられ、平安期以降新たに開発された村という見方が強く主張されはじめている。本県で、その特徴的な状況を端的に呈しているのが八ヶ岳南麓で、最近の発掘調査によってかなり具体的な様相も明らかにされつつあるので、その様子をながめて見よう。

次表は、昭和六十一年（一九八六）の時点において集約された資料である。この表でも明らかなように、八ヶ岳南麓の台地上では主に平安時代の九世紀後半になって一斉に集落が出現し、営まれた状況が認められるのである。しかも、その

八ケ岳南麓における主な平安集落一覧

遺跡名	標高(約m)	立地	年代(A.D) 700 800 900 1000 1100
中田小学校	400	自然堤防上	
大豆生田	470	〃	
宮間田	513	河岸段丘上	
大小久保	600	尾根上	
湯沢	610	〃	
海道前	660	尾根縁辺	
小和田	720	尾根上	
柳平(73年調査区域)	720	〃	
青木北	740	〃	
東久保	745	〃	
前田	750	〃	
木ノ下・大坪	750	〃	
御所前	780	台地上	
寺所	780	尾根上	
原田	780	〃	
城下	800	〃	
東姥神B	890	〃	
東原	900	〃	
上平出	920	台地上	
中原	920	〃	

集落の出現から解体に至る年代は報告書等に準拠しているが、未発表遺跡については調査担当者のご教示を得て概略を記した。なお、前半、後半というように年代が示されている場合は、便宜的に50年を境として表示している。

立地については、集落址の両側を河川、沢等で挟まれた細長い地形を呈している場合、とりあえず尾根上という表現をとった。(『山梨考古学論集』Ⅰより転載)

このような集落は、一般には、八世紀代に出された百万町歩開墾計画や、三世一身法、墾田永世私財法などの一連の開墾奨励策と深くかかわって新たにつくり出された集落と見る考えもあり、一定の意図のもとに計画的につくられた村落として計画村落という表現も使われているのである。

八ケ岳南麓に展開する集落址群が、右のような特徴を見せるのと同様に、富士北麓の地域もまた同じようなあり方を示している。以前、堀内真氏がまとめた「富士北麓地方における平安時代遺跡」(『信濃』三〇—九)を参照しても、前段階の奈良時代の集落はまったく見ることができず、まさに、未開の土地を切り開いて集落を形成した観さえ示しているのである。これは甲府盆地東部一帯の、例えば甲斐国分寺周辺の集落址が弥生時代や古墳時代などの集落基盤の上に継続して営まれる、いわゆる伝統的集落とはまったく異なった対照的な状況をつくり出しているのである。

奈良時代の遺跡はほとんど見られず、平安時代に至って新たに出現する集落があまりにも多いことに気づくのである。平安時代に、このように山麓や山間辺地に深く集落が進出し生活の場を求めようとした背後には、先に述べた開墾奨励策に刺激され導き出された動きを考えていかねばならず、そうした歴史的背景をこの富士北麓の地にも見なければならないであろう。

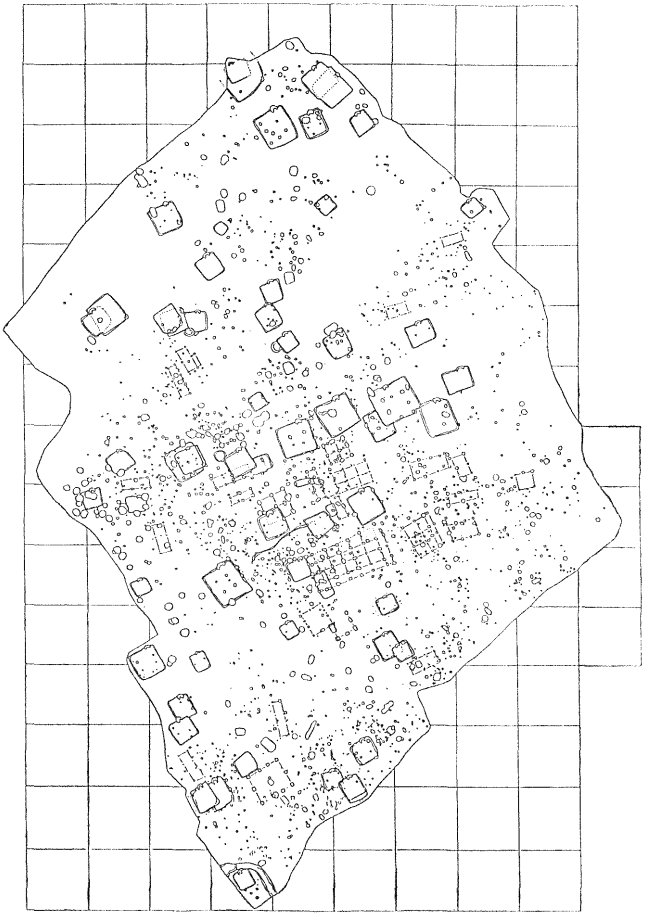
堀内真氏はまた、富士北麓地方の平安期の遺跡の特色の一つとして「当時は富士山の新期火山活動が盛んに繰り返えされ、新期熔岩流下にも遺跡は存在している。」と述べ、溶岩流下に眠る富士吉田市下吉田字西丸尾の馬捨場遺跡を詳しく紹介している。この溶岩流の下部から当時の遺物が検出され、遺跡が埋没していることは、本村でも指摘されている。それは、本村丸尾青木ヶ原溶岩流下から出土した資料としてかつて山本寿々雄氏が報告しており(『広報なるさわ』昭和五十六年二月一日)、村内にも広く埋没遺跡が存在する可能性を示唆しているのである。

このような現象は、隣接する上九一色村においても眺めることができる。同村の本栖湖畔に所在している湖水遺跡や上野原遺跡では溶岩下部から古墳時代や平安時代を主体とする土師器片が発見されており、この事例によって当時の村が湖畔に深く埋没している様子が明らかにされてきたのである。

右の一連の溶岩に埋もれている遺跡の状況は、かつて富士北麓にはかなり広範囲に及んで村々が展開し、それが富士溶岩流に押し流され、埋もれていった様子さえうかがわせているのである。貞観六年(八六四)に富士山が大噴火して本栖湖と剗せの海を埋め、人畜に多大な被害をもたらした記録(『日本三代実録』)などは、こうした状況を直接的に裏づけることになり大変興味深いのである。

さて、それではこのころの人々はどのような村を形づくり、そしてどういう暮らしを営んでいたのだろうか。このことを如実に示す資料は、今村内では見当たらないため、県内の遺跡からその様子を眺めて見よう。

武川村宮間田遺跡の遺構配置図
（1986年度調査分『山梨文化財研究所報』第１号より転載）



右図は、北巨摩郡武川村の宮間田遺跡の遺構配置図である。この遺跡は、最近「村」や「牧」の文字が土器に書かれていて大変話題になった所で、とくに発掘当初から古代の官牧の一つである「真衣野牧」とのかかわりが指摘され注目を受けてきた古代集落址である。この図で理解できるように、当時の家屋は地面を掘り窪めて床を作り、その上

に上屋を架す竪穴住居址が主体を占め、村を形成していた。竪穴住居址は、縄文時代以来我が国において数千年にも及んで継続して使用されてきた家屋構造であり、平安時代に至っても依然として地方における住居形態の主流を占めていたのである。但し、住居の内部には縄文時代、弥生時代を通じて伝統的に使用されてきた炉に代わって、カマドが導入されていた。

竪穴住居址が日常の住（すまい）の役目を果たしていたのに対し、倉庫、納屋、あるいは公的な建物等には掘立柱建物址が使用されていた。宮間田遺跡で見る柱穴状に示している家屋形態のものがそれであるが、この建物は竪穴式住居とは構造的に異なり、地面に直接柱を建て、上屋をのせる現代の建築様式に近い構造をもっている。こうした建物は、宮間田遺跡を見ても村の中に点在している様子がわかり、竪穴住居と一体となってそれぞれの機能を果たしていたものと思われるのである。現在村内に埋もれている平安時代の集落も、規模の違いこそあれ、右に示した宮間田遺跡のような住居址群によって形成され、日々の生活が営まれていたことを想像し大過ないであろう。

この当時の人々は、日常生活に必要な容器類として土師器と須恵器を主に使用していた。土師器については、すでに古墳時代の項でも説明してきたとおり、古墳時代以降継続的に使用されてきた土器群であり、煮沸用としての甕形土器、貯蔵用としての壺形土器、あるいは物を盛るための坏形土器や供献用の高坏形土器等々、用途に応じてバラエティーに富んだ器種が見られ、その破片が今回の分布調査によって村内から採集された遺物類である。

また、宮間田遺跡ではこれらの土師器類に墨書による文字が書かれている例が多く見られる。これを墨書土器と呼んでおり、このころには各地域に普遍的に見られる現象である。先に述べた「村」あるいは「牧」などの墨書はその貴重な例であり、このように村々に墨書土器が多く見られることから、少なくとも村の中に文字を識る有識層が存在していたことは確かである。甲斐国内のこのころの集落址いずれを見てもこうした傾向がうかがえるので、おそらく

村内の遺跡に対しても同様なあり様を思い浮かべて良いであろう。

ところで、村内の平安時代遺跡群の分布状況をながめて見ると、本村の東部地域に割合に多く集中する傾向を示していることが理解できる（遺跡分布図参照）。そこに点在する遺跡群をあげると大持遺跡、大木原遺跡、小暮遺跡、小坂A遺跡、小坂B遺跡、上大持遺跡、犬の子草里遺跡、長塚遺跡の各遺跡であり、とくにその中でも17の上大持遺跡は遺物の散布状況も比較的濃密な状態を示している。また平安期を過ぎ、中世以降になると、村の西側方面に遺跡が多く分布するようになり、集落が移動する様相を呈す。このような現象がなぜ生まれてきたのか詳細は今後の調査を待たなければならないが、一つには村内を通過している古代から甲斐と駿河を結ぶ官道であつた「若彦路」の影響を考えなければならないであろう。若彦路の経路と遺跡の分布状況を眺めていくと、平安期の遺跡群の間を官道が通過する状況となり、集落と官道の関係が明瞭に示されて興味深いのである。おそらく、村内の平安期の集落群は何らかの格好で若彦路とかかわりをもちながら存在し、発達していったのであろう。

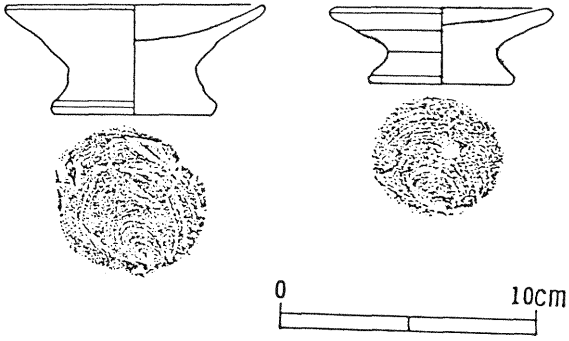
村内にはこのように若彦路の発展と深く結びついた古代集落が多く埋もれている可能性が、今回の分布調査によって明らかにされてきた。その実態は現在のところではほとんど未解明の状態におかれたままではあるが、今後の詳しい調査研究によって、本村の古代社会のより鮮明な姿が次第に浮かびあがってくるであろう。

（萩　原　三　雄）

第六節　中・近世

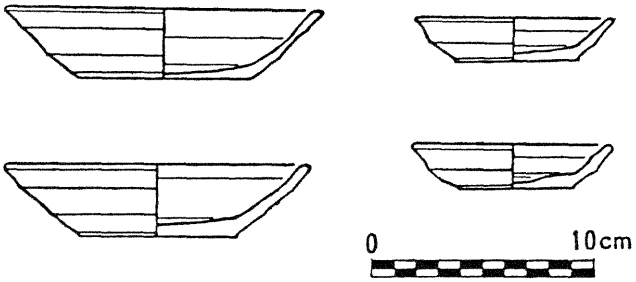
本書編さんに伴う村内の遺跡分布調査においては、合計二十一ヵ所の遺跡が確認された。この内、中世以降の遺跡は、十一ヵ所を数え、土師質土器片と陶器片が採集されている。

土師質土器は、古代において用いられた土師器と同じ素焼の土器であるが、その名称には土師器とは異なっているものであるとする意味が含まれている。甲斐国において土師器から土師質土器に移行する時期は、十一世紀末とされており（坂本美夫「甲斐国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』二一号）、器形・胎土ともに変化が見られる。この発生期の土師質土器は、底部の厚みが増すいわゆる柱状高台の土器が主となっており、国中地域においては一宮町笠木地蔵遺跡、増穂町権現堂遺跡等で出土している。この種の土器は本県を中心に諏訪盆地、横浜市などでも出土しているが、今回の遺跡分布調査も含め郡内地域においては現在のところ確認されてはいない。柱状高台を伴う時期は十二世紀末まで続くとされるが、これ以降の土師質土器の形態的な変遷についてはまだ十分に研究が進んでいるわけではない。昭和五十二年に末木健氏が（「平安時代以降の土師質土器の編年について」『信濃』二八―九）、昭和五十八年に坂本美夫氏が（「山梨県における十五世紀以降の土師質土器編年」『甲斐考古』二〇の一）国中地域の資料を用いてこの時期の土器編年を試みているが、年代が想定できる資料が少ないため形態的な変化を流れとして把握するには至っていないのが実状である。また、土師質土器は極めて在地性が強い土器であるといわれ、流通圏が狭いことが指摘されている。そのため鎌倉など編年についての研究が進んでいる地域があってもその編年をそのまま他地域に引用することはできない。このような事情に加え、今回の遺跡分布調査において表採された土器片はいずれも小破片であるため、さらに年代を限定するのは難しいわけである。

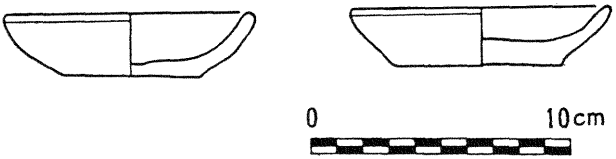


一宮町笠木地蔵遺跡出土の柱状高台の土器
（長沢宏昌ほか『笠木地蔵遺跡』1985より）

表採された遺物を見てみると、大きく皿類と煮炊具類とに分けることがで



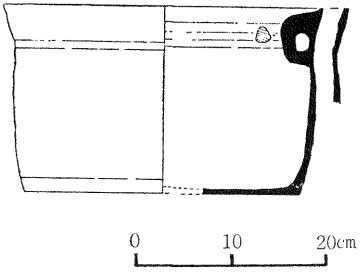
勝沼町岩崎館跡出土の皿、小皿
（山崎金夫ほか『(伝)岩崎館跡発掘調査報告書』1977より）



境川村寺尾出土の土師質土器
（坂本美夫『甲斐考古』20の1　1983より）

きる。皿類は小鳴沢遺跡、並木A遺跡等で採集されており、小鳴沢遺跡においては底部端から体部にかけての破片が表採されている。土器の大きさが比較的わかる資料はこの小鳴沢遺跡のものだけであるが、皿としては小型の部類にはいる。坂本美夫氏は勝沼町の岩崎館跡（十三世紀中ころから十五世紀中ころにかけて営まれたと考えられている）から出土した土師質土器の分析をおこない、法量により皿と小皿に分類した（『(伝)岩崎館跡発掘調査報告書』）。また同氏は、境川村寺尾出土の土器について陶器との伴出関係により、十七世紀後半から十九世紀前半ごろまでといった年代をあたえている（前掲の『甲斐考古』二〇の一）。この土器をみると、一つが口径九・九㌢、もう一つが口径一〇・二㌢と比較的小型であることがわかる。これらのことから、近世の土師質土器に皿・小皿の区別が残存しているかどうかは不明であるが、近世においては全体的に小型化することが予測される。小鳴沢遺跡の土器は、このことから近世の所産と考えられる。中世以降と記した他の遺跡についても、陶器類が新しいものが多いことから全体的には近世以降のものが多いと考えられる。

一方煮炊具の破片と考えられる土器片も、並木B遺跡、道下遺跡など五ヵ所の遺跡から採集されている。これらの



長野県茅野市御社宮司遺跡出土の内耳土器（小林秀夫ほか『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』茅野市その5　昭和52, 53年度　1982より）

土器片は、胎土の特徴等により内耳土器の破片と考えられる。内耳土器は、中近世における一般的な煮炊具であり、取っ手の部分が可燃性であるため体部との接続部が内側にあることによりこの名称が付けられている。

遺跡の分布をみると先史・歴史時代ともに現在の鳴沢、大田和の両村落の周辺に限られていることがわかる。しかし村内一帯は富士山の噴火の影響等により不安定な地域であるため、遺跡が確認されなかった所においても地中深くに遺構・遺物が埋蔵されていることは十分考えられることである。足和田山南側山裾に水源地が点在していることは、その南側山麓に遺跡が集中していることと関連があるものと思われる。

鳴沢村内には現在、城館跡として伝えられている所は見あたらない（『山梨県の中世城館跡』）。しかし「一村一屋敷」といわれ、土豪層の屋敷は村内に必ず存在するものと考えられている。近年城館跡に関する研究が進むなか、城館に関連する地名による状況復元もさかんにおこなわれている。鳴沢には「堀の内」、大田和には「的場」という小字があり、城館との関連が注目される。

字屋坪の北、足和田山山腹には「物見処」と呼ばれる所がある。現地は南東方向にのびるなだらかな尾根上であり、人工的な削平地等は見られない。鳴沢の村落への展望は、足和田山からのびる尾根によって半分ほど閉ざされており、性格については確定してはいない。また、足和田山山頂から大和田へ下る東海自然歩道沿いに「役行者屋敷」と呼ばれる所があり、『甲斐国志』には「壇ノ山ノ内雨乞山ノ上ニアリ少シ平地ナル所礎石存セリ其辺ニ小池アリ麗水常ニタタヘテ旱魃ニモ涸ルコトナシ往昔ハ山伏ドモ此山ニ参籠シ行法ヲ修シケルトゾ……」と見え、現在も削平地

に礎石が数個残存している。居館が傾斜面を削平して造営されるケースは十二世紀後半から見られ、十三世紀後半ないし十四世紀以降に一般化するが（橋口定志「中世居館の再検討」『東京考古』五）、この役行者屋敷については、大田和の村落から登るのに四十分以上もかかる山中であるため、当初より信仰にかかわり造営されたものと考えられる。（畑　大介）

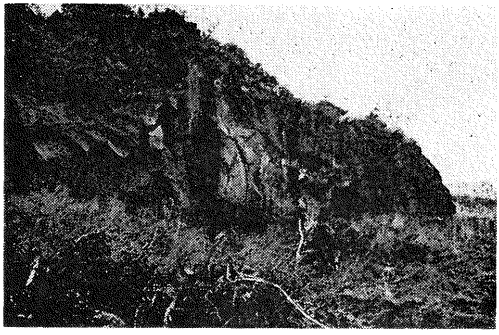
第七節　村内の遺跡

1　前丸尾遺跡

鳴沢村前丸尾地内に所在し、標高九百八十㍍に立地する。本遺跡ではかつて採石作業中に青木ヶ原溶岩流の直下より土器が出土している。

出土した遺物は平安時代初頭の土師器破片で、遺物は現在甲府市在住の山本寿々雄氏が保管している。山本氏の所蔵の土師器は甕形土器の口縁部一点、底部二点である。口縁部破片は頸部がくの字状にくびれ、胴部に縦方向のハケ目調整を行っている。器壁の厚さは8㍉～9㍉を測り、胎土中に金雲母を含む。底部破片はいずれも底と胴下半部の接合部が屈曲するもので、内外面にハケ目を残す。

山梨県埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば、山本氏所蔵の土器以外に古墳時代の高坏が存在すると記録されているが、現在その所在および詳細については不明である。いずれにしても、本遺跡は上九一色村湖水遺跡とともに、新期



前丸尾遺跡

富士溶岩流の下の遺跡の存在を知る上で数少ない遺跡としてとらえることができる。

2　蛇休場遺跡

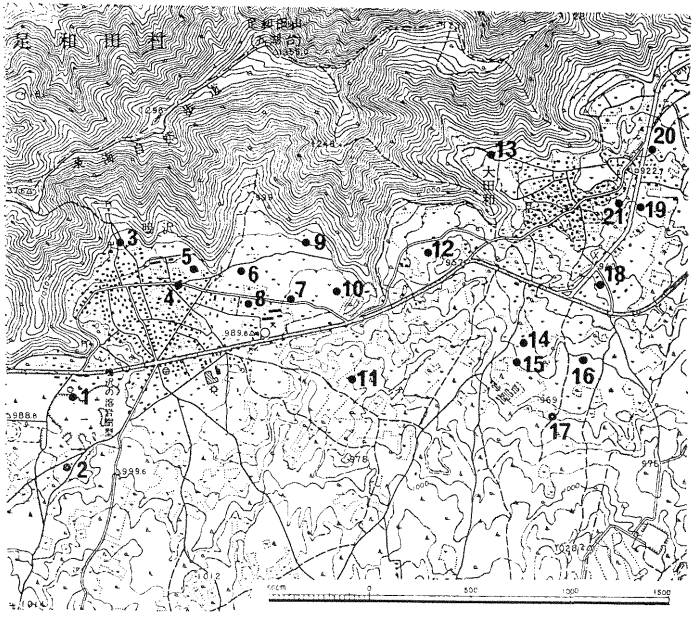
スポーツ広場の南、字蛇休場に所在する。標高九百七十五㍍付近の畑内に陶器片・土師質土器片の散布がみられる。土師質土器片は外面が黒変しており、中世以降用いられた内耳土器等の煮炊具の破片と思われる。

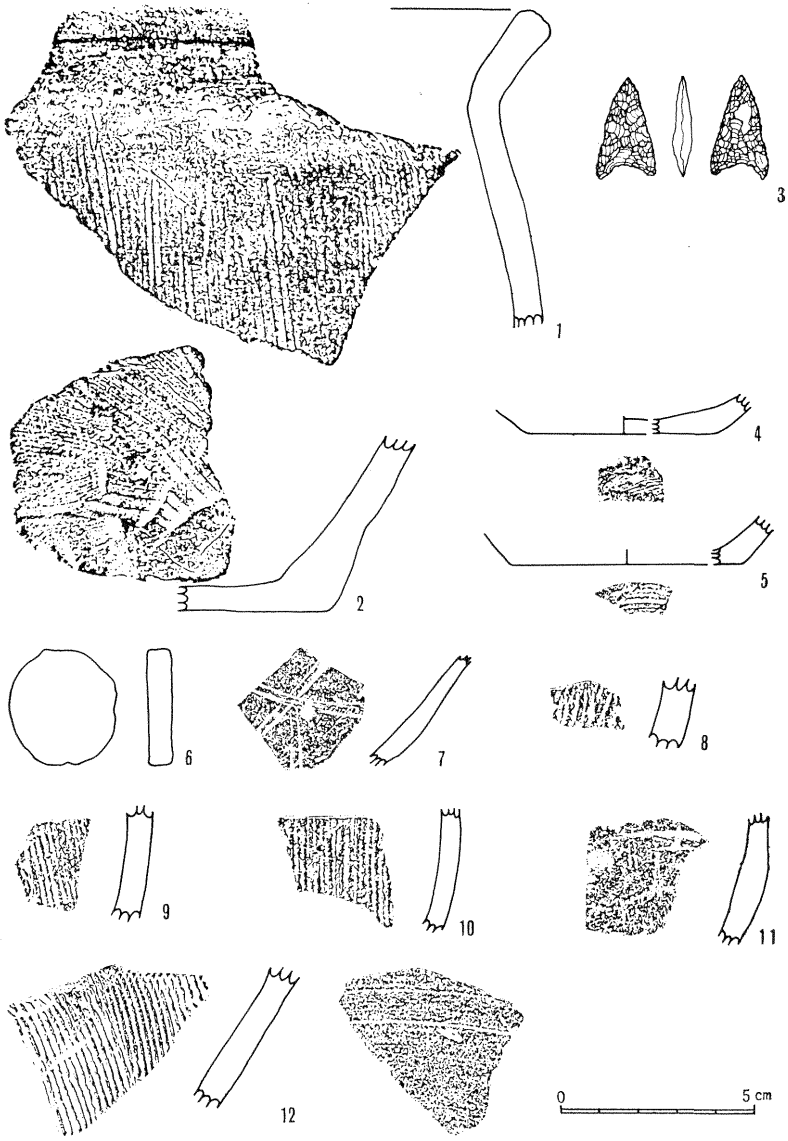
3　水上遺跡

通玄寺と春日神社の間に位置し、春日水源地付近からの水流により形成された小型の扇状地上である。縄文時代前期から中期にかけての遺跡であり、範囲は東西・南北ともに二百㍍と広い。

4　地蔵前遺跡

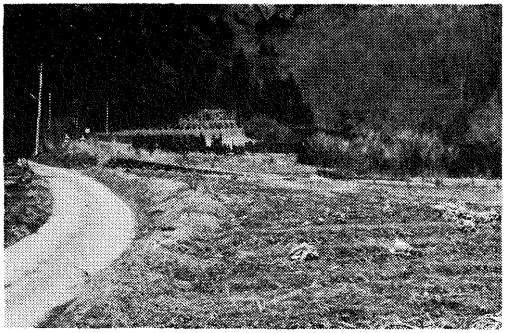
昭和五十五年十二月十九日、鳴沢の渡辺長氏宅の軒下を排水施設整備のため地下二㍍五十㌢ほど掘ったところ、表土より二㍍の深さから縄文時代の石鏃が発見された。黒曜石製で、長さ二・五㌢、幅一・五㌢を測る（『広報なるさわ』昭和五十六年二月一日発行より）。


足和田村
足和田山
(天狗岩)
東海自動車道
1248
1200
1150
1100
1050
1000
989.6
989.6
989.6



村内採集遺物（1・2の拓影は山本寿々雄氏による）

1・2　前丸尾遺跡　3　地蔵前遺跡　4・5　小鳴沢遺跡　6　小暮遺跡
7　小坂A遺跡　8　小坂B遺跡　9～11　上大持遺跡　12　札木遺跡



水上遺跡

5　小鳴沢遺跡

足和田山麓の字小鳴沢に所在し、畑内に土師質土器片の散布が見られる。表採遺物の中には、皿の底部から体部にかけての破片が数点あり、底部には回転糸切痕が明瞭に残っている。

6　並木A遺跡

臼田和水源地付近を扇頂とする扇状地上に位置し標高約九百八十㍍の畑内に土器片の散布が見られる。大半は中世以降の遺物であるが、平安時代の土師器の甕の破片と見られるものもある。

7　並木B遺跡

鳴沢小学校北側の字並木内に位置する。採集遺物は陶器片と土器片であるが、土器片は外面が黒変しており、中世以降用いられた内耳土器等の煮炊具と考えられる。

8　道下遺跡

字道下に所在する。役場北側の住宅地の間の畑内に陶器片、土器片の散布が見られる。陶器片は近世以降のものが大半であるが、散布量は比較的多い。土器片は隣接の並木B遺跡同様、土師質で内耳土器等の破片と思われる。

9　東臼田和遺跡

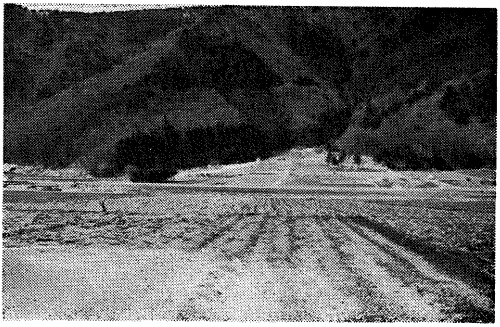
足和田山南麓の字東臼田和に所在する。標高九百八十五㍍付近の畑内に土師質土器片の散布が見られる。

10　境野道上遺跡

字境野道上に所在する。採集された遺物は、中世以降煮炊具として用いられた内耳土器等の土鍋の破片と思われ、偏平であるため底部と考えられる。

11　大持遺跡

鳴沢村大持地内に所在する。富士山北側の裾末端部に位置し、標高九百八十㍍を測る。地表面で採集された遺物は、土師器または土師質土器と考えられる素焼の小土器二点で、一点は鉢形土器頸部、他の一点は内耳土器胴部破片と考えられる。



東臼和田遺跡

12　大木原遺跡

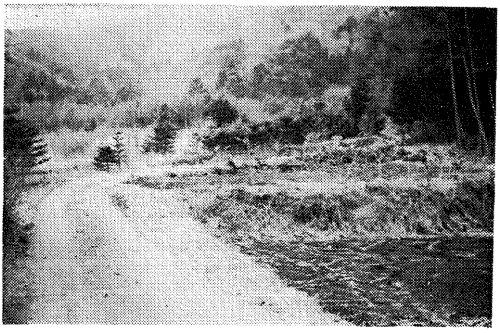
鳴沢村大木原地内に所在し、標高九百五十㍍を測る。付近は富士山麓と足和田山のほぼ接点に位置し、足和田山の尾根が遺跡の東西にせり出している。遺物は、土師器片一点と施釉陶器一点が採集されているが、小破片のため確実な時代決定は困難である。

13　大田和遺跡

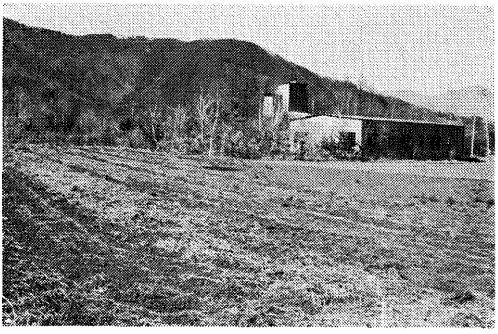
鳴沢村大田和地内字家上川原に所在する。足和田山東部の扇状地上に立地し、標高九百五十㍍を測る。昭和四十七年の山梨県埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば、この遺跡から縄文時代早期の茅山式、前期の諸磯b式の土器が採集されたことが報告されており、周辺に該期の集落跡が存在するものと考えられる。採集された遺物は現在所在が不明である。

14　小暮遺跡

鳴沢村小暮地内に所在し、標高九百四十㍍を測る。遺跡は富士山北麓に発達した南北に長い小さな谷部に立地する。表採遺物は土製円盤一点と土師器の土器片一点である。土製円盤は、無文の縄文土器を加工し、再利用したもので、二・八㌢×二・六㌢の楕円形を呈する。周囲は磨かれ一端に切り目が認められることから土器片錘として使用された可能性もある。無文のため正確な時期は判断しがたい。一方、土師器は内面黒色の坏形土器で、平安時代に比定される。



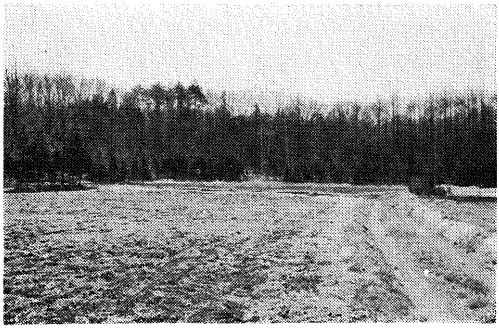
大田和遺跡



小暮遺跡

15　小坂A遺跡

鳴沢村小坂地内に所在する。付近は富士山北麓の緩やかな北斜面に立地し、標高九百五十㍍を測る。遺物は平安時代の土師器一点が採集されている。坏形土器胴部の破片で、器面にヘラケズリによる調整痕が見られる。器面調整後、半截竹管による平行沈線が施されるが、小破片のため描かれた文様ないし文字は判断できない。胎土および製作手法から甲府盆地内で製作された甲斐型の坏と考えられる。



上大持遺跡

16　小坂B遺跡

鳴沢村小坂地内に所在し、標高九百五十㍍を測る。小坂A遺跡の東約三百㍍に位置し、両遺跡間には小さな谷が南北に走る。遺物は、奈良時代から平安時代に比定される土師器二点が表採されている。甕形土器胴部破片で、器面はハケで調整がなされる。

17　上大持遺跡

鳴沢村上大持地内に所在する。富士山北麓の緩やかな北斜面に立地し、標高九百七十㍍を測る。この遺跡からは土師器の小破片十八点が表面採集されている。土器表面が若干磨滅しているものの、ハケ目痕を残す土器が五点存在し、ほとんどが甕形土器である。これらの土器は奈良時代から平安時代のものと考えられる。

18　犬の子草里遺跡

鳴沢村の犬の子草里地内に所在し、標高九百五十㍍を測る。坏形土器と考えられる土師器の小破片が表面採集されているが、正確な時期決定はできない。

19　札木遺跡

鳴沢村札木地内に所在し、標高九百二十㍍を測る。土師質土器一点と中・近世の施釉陶器四点が採集されている。

20　長塚遺跡

鳴沢村長塚地内に所在し、富士山北麓の尾根上に位置する。遺物は平安時代の坏形土器二点が採集されている。

21　前原遺跡

鳴沢村前原地内に所在する。札木遺跡より百㍍ほど西の谷部に位置し、標高九百二十㍍を測る。遺跡からは中・近世の施釉陶器九点が採集されている。

鳴沢村遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	出土・表採遺物	備考
1	前丸尾遺跡	古墳・平安	土師器	
2	蛇休場遺跡	中世以降	陶器・土師質土器	
3	水上遺跡	縄文	縄文土器	山本寿々雄『甲斐石器時代遺物発見地名表』一九五五
4	地蔵前遺跡	縄文	石鏃	
5	小鳴沢遺跡	中世以降	土師質土器	
6	並木A遺跡	平安・中世以降	土師器・土師質土器	
7	並木B遺跡	中世以降	陶器・土師質土器	
8	道下遺跡	中世以降	陶器・土師質土器	
9	東臼田和遺跡	中世以降	土師質土器	
10	境野道上遺跡	中世以降	土師質土器	
11	大持遺跡	平安・中世以降	土師器・土師質土器	
12	大木原遺跡	平安・中世以降	土師器・陶器	
13	大田和遺跡	縄文	縄文土器	山本寿々雄『甲斐石器時代遺物発見地名表』一九五五
14	小暮遺跡	縄文・平安	土製円盤・土師器	
15	小坂A遺跡	平安	土師器	
16	小坂B遺跡	平安	土師器	
17	上大持遺跡	平安	土師器	

18	犬の子草里遺跡	平安	土師器
19	札木遺跡	中世以降	陶器・土師質土器
20	長塚遺跡	平安	土師器
21	前原遺跡	中世以降	陶器

（中山誠二　畑大介）